

## イギリスでの国際会議の参加報告

Philosophy of Psychotherapy Conference 2011

陳 姿菁

開南大学応用日本語学科学科長

台湾大学日本語学科兼任助理教授

2002 年度奨学生

2011年7月8日から11日にかけてイギリスのイースト・アングリア大学(University of East Anglia : UEA)で開催された Philosophy of Psychotherapy Conference という国際会議に参加しました。この学会は精神療法と哲学の接点を探ろうという趣旨で開催された国際会議です。

UEA はとても魅力的な都市であるノリッジにキャンパスがあります。1963年に設立され、ロンドンから凡そ90分の距離に位置しています。かつて全国学生調査の学生満足度の投票において、イングランドにある大学中トップ5にランクされたこともあります。また、タイムズ紙の優良大学ガイドで、20位にランク付けされたこともあります。

UEA は人文、保健、科学・社会科学部において国際的に有名です。ちなみに、2001年にノーベル生理学・医学賞を受賞したポール・ナース氏はここの出身です。そのほか、精神療法であるフォーカシングの分野において、中心的な役割を担っている大学としてイギリスでは有名です。また、この分野においては、パーソンセンターのトレーニングの実施を行っており、イギリスのみならず、ヨーロッパでも有数の大学です。フォーカシングとは来談者中心療法 (Client-Centered Therapy) を創立したカール・ロジャーズの弟子であるユージン・

ジェンドリン博士が開発した手法です。ヨーロッパではイギリス、特に UEA が中心地となっています。



イギリスを含む多くの国では、精神療法のアプローチは「医学的モデル」の範疇に入るべきか、それとも認知的、あるいは経験論の範疇に入るべきかという議論が繰り返されています。主催者側によれば、実際の臨床経験では精神療法はさまざまな問題を抱えています。たとえば、この分野の研究は、プロセスと結果の実証に集中する傾向があります。そのためか、精神療法は、常に精神病、妄想などの論争のある怪しげな概念と背中合わせです。

さらに、精神療法理論の技術もしくは半技術概念、例えば「無意識」、「認知」、「情報」、「原型」、「自我概念」などは日常の言語や

臨床実践との関係において、必ずしも因果関係が科学的に明らかになっているとは言えません。そのため、この会議の目的は、精神療法に興味を持っている哲学者及び哲学に興味を持っている心理療法研究者を集め、精神療法の視点から、哲学的な議論の場を設け、両方の相互理解を促進することです。臨床心理学と哲学の2大分野に跨る趣旨で開催されている学会であるため、規模はそれほど大きくはありませんが、それでもイギリス、アメリカ、トルコ、スイス、スウェーデン、日本など世界各国から四十数名のセラピストや哲学に関心のある関係者が集まりました。台湾からの参加者は私一人でした。

3日に渡る会議ですが、発表論文は12本で、キーノートレクチャー2つ、フォーラム2つで構成されています。

本来なら、哲学的な概念を中心に議論して欲しいという主催側の趣旨がありましたが、新しい試みですので、一部のセラピストの重点は、やはりいかに「治療」するかでした。

哲学の議論も行われました。素人の私にとって、当初なぜ精神療法と哲学という二つの分野から議論する必要があるのか疑問を感じました。実は、カウンセリングの現場では、セラピストたちは「人生は何のために生きているのか」、「私とはどういうものか」というような哲学的な問いによく直面しているそうです。技術的にクライアントを助けることに最善を尽くす一方、このような根源を探る哲学の問いに戸惑い、哲学に答えを求めようとする人が少なくないとのことでした。心理相談を受けることは往々にしてさまざまな悩み、いわば人生相

談です。カウンセリングを行う人にとって、哲学は避けては通れない問題であることを参加者たちとの会話を通して垣間見ることができました。



そもそも私の専門分野とは関係の薄い学会ですが、新しい刺激を求める目的で参加してみました。異なる分野間で新しい試みを求める姿、行き詰まっている療法に新たな打開を模索する姿勢は、非常に勉強になりました。多くの場合、精神的な病に対して薬に頼る療法を思い起こしますが、精神的な病を患った患者を所謂、病人として見つめるのではなく、対面しているのは「人間」そのものであるという観点が重要だと感じました。振り替えてみれば、教育の現場に携わるものとして、われわれが扱っているのも「教科」ではなく、「人間」であることを改めて思い知らされ、直面している問題を「人間」という観点から考え直さなくてはならないと強く感じました。